

ページ設定について：用紙 A4 サイズ、余白は標準、文字数 40 文字、行数 30 行

アウグスト・フォン・ベヒマンの錯誤並びに条件論

堀川 信一

はじめに

当事者が予期しなかった事態の発現後、そのまま法律行為を維持し続けること
のリスクを解消するための手段として、民法 95 条は幅広い事例に適用されてきた¹。しかし、本来、判例理論が前提としている二元説からは、当事者が上記の
ようなリスクに備えた合意している場合には、95 条の適用に優先して、当該合
意の効力に基づき契約が解消されるのが望ましいはずである。こうした観点か
らは、判例における同条の適用につき、疑問とせざるを得ない事案が存在する。

・・・[中略]・・・

第 1 章 ベヒマンの錯誤並びに条件論の紹介

一 同一性メルクマール (Identitätsmerkmal) と客体の錯誤との関係

ベヒマンは、第一に、契約が有効に成立するためには、売買の対象を他のす
べての現存する物と区別するための基準、すなわち同一性メルクマール
(Identitätsmerkmal)を充たす必要があるとする。そして、①これが欠けている
場合には、対象の特定性を欠くことになること、②このメルクマールが現に存
在しない対象の上に定められた場合には、契約は客体を欠くことになること、
そして、③同一性メルクマールが、ふさわしくない対象に錯誤によって関連付
けられた場合には、その錯誤は客体の錯誤(error in corpore)になることの三点を
指摘する。この客体の指示の仕方に関して、「厩舎の中の右の馬」という指定が
なされたが、そこには当事者が思っていたのと別の馬がいた場合であっても、

¹筆者は現在、別稿において日本における錯誤判例の展開について検討中である。拙稿「日本法における錯誤論の展開とその課題(一)～(四)未完」大東法学 25 卷 1 号(2015 年)171 頁、同 25 卷 2 号(2016 年)121 頁以下、同 26 卷 2 号(2017 年)203 頁以下、同第 27 卷 2 号(2018 年)183 頁以下。

コメントの追加 [d1]: 論文タイトル。中央揃え。14 ポ
イント。字体 MS ゴシック。

コメントの追加 [d2]: 右寄せ。氏と名の間を全角で一
字空ける。
肩書きは書かない。副題がない場合、氏名は 2 行目から。
字体 MS 明朝。

コメントの追加 [d3]: 目次は入れない。

コメントの追加 [d4]: 氏名から一行空ける。字体は MS
ゴシック。文字サイズは 12 ポイントとする。

コメントの追加 [d5]: 本文字体は MS 明朝。サイズは
12 ポイントとする。

コメントの追加 [d6]: 注は脚注ではなく文末注とする。
※下記の形式は「脚注」。

コメントの追加 [d7]: 章以下の見出しについても MS ゴ
シックとする。文字サイズは 12 ポイント。章以下の見
出し番号については、一、1、(1)の順とする。